

高校教員に聞く! 2022年度入試結果

高校から見た2022年度入試はどうだったのか? 全国各地6校の進路指導担当者に総括してもらった。併せて新高3生の状況についても聞いたので、募集活動の参考にされたい。

高校名	札幌大谷高校 進路指導部長 佐藤 史	千葉商科大学付属高校 進路指導部長 深澤 拓央	上野学園高校 (東京) 進路指導部主任 竹澤 陽介	東京都立保谷高校 進路指導部主任 大月 正	大阪府立枚方津田高校 2学年主任/大阪府高等学校進路指導研究会事務局長 松本 太郎	岡山県立林野高校 教頭 竹内 稔/進路主任 満田 幸一郎/3学年主任 山田 雅之
学校概要	▶種別:全日制/普通科、音楽科、美術科/共学 ▶生徒数:1学年250~350人	▶種別:全日制/普通科、商業科/共学 ▶生徒数:1学年約300~500人	▶種別:全日制/普通科、音楽科/共学 ▶生徒数:1学年約200人	▶種別:全日制/普通科/共学 ▶生徒数:1学年約300人	▶種別:全日制/普通科/共学 ▶生徒数:1学年約300人	▶種別:全日制/普通科/共学 ▶生徒数:1学年約130人
合格実績	北海道大学、小樽商科大学、北海道教育大学、帯広畜産大学、岩手大学、東京学芸大学、筑波大学、札幌市立大学、同志社大学、立命館大学、成城大学、成蹊大学、武蔵大学、札幌大谷大学、北海学園大学、北星学園大学など	千葉商科大学、千葉大学、高知大学、早稲田大学、慶應義塾大学、明治大学、立教大学、青山学院大学、学習院大学、中央大学、法政大学、成蹊大学、明治学院大学、獨協大学、日本大学、東洋大学、駒澤大学、専修大学など	東京海洋大学、信州大学、群馬県立女子大学、韓国藝術大学、東京理科大学、法政大学、中央大学、学習院大学、昭和大学、東邦大学、國學院大学、東京電機大学、日本女子大学など	静岡大学、東京都立大学、東京学芸大学、早稲田大学、法政大学、立教大学、明治大学、青山学院大学、東洋大学、日本大学、東京経済大学、亜細亜大学など	追手門学院大学、大阪学院大学、大阪経済法科大学、大阪国際大学、大阪産業大学、大谷大学、大手前大学、関西外国語大学、関西大学、京都芸術大学、京都産業大学、近畿大学、摂南大学、同志社大学、阪南大学、龍谷大学など	九州大学、岡山大学、島根大学、香川大学、愛媛大学、山口大学、就実大学、立命館大学、関西大学、近畿大学、龍谷大学、関西外国語大学、京都産業大学、甲南大学、大阪経済大学、ノートルダム清心女子大学、美作大学など
2022年度入試結果	<p>進路指導の取り組み</p> <p>▶基本方針は「学力の3要素とAPを意識した大学選び」と「3月31日まで第1志望合格に向けてあきらめずがんばればチャンスはある」。APに合っていない、主体性のない生徒は推薦しない。推薦書も定型文ではなく、学力の3要素の観点から生徒を観察し、具体的なエピソードを交えた推薦書を作成</p> <p>▶SYMPA*などにあがった入試や大学情報をGoogleのストリームに、ほぼ毎日、アップ。生徒、保護者、教員全員が同じ情報を共有し、それを基に判断</p>	<p>▶基本方針は「生徒のやりたいようにやらせる」迷っている生徒には教員が働きかけるが、「あせよ、こうせよ」とは指導しない</p> <p>▶1年次から積極的にオープンキャンパスに参加させ、生徒が志望校を決めた段階で、教員が相談に応じるオーダーメイド型。あまり学校側からレールを敷くようなことはしない</p>	<p>▶基本方針は「第1志望に最後までチャレンジさせる」</p> <p>▶探究学習に力を入れているため、年内入試はその成果を使って、まずは総合型選抜に挑戦させ、ダメだったら指定校推薦を活用するという2段階の指導。指定校推薦は減らす意向</p>	<p>▶基本方針は「生徒の希望進路実現」。大学選びにおいては、自分が何者か知り、それに合った大学選びが重要であると指導</p> <p>▶一般入試合格者のほうがミスマッチが少なく、年内入試で合格した者より中退率が低いと、一般入試受験を重視。大学入学後にしっかり成長するために必要な基礎学力を継続的な努力によって身に付けさせる</p>	<p>▶将来の仕事について考えさせ、そこから逆算して進路を考えさせる指導を行っている</p> <p>▶大学であれ専門学校であれ、生徒はあまり学校を比較・検討せず、知名度の高いところを志望する傾向がある。志望理由書を書かせても、他校との比較もしないので、ただ学校のことをほめるだけ。そのため、低学年時から積極的に各校の比較に取り組みさせたい</p>	<p>▶基本方針は、基礎学力をしっかりと伸ばし、一般入試で大学進学を狙わせる</p> <p>▶少人数教育で、経済的な負担も少ないという理由から、例年よりも国公立大学進学者を多く出すことを目標に掲げていた</p> <p>▶地域への理解を深める探究活動「みまさか学」を実施しており、探究内容を活かして総合型選抜に挑戦することも生徒に勧めている</p>
受験状況	<p>▶一般入試約25%、年内入試約75%</p> <p>▶道外大学を受験する生徒が前年約15%→約18%に増加。これは道外の大学情報や札幌試験会場一覧などを配信した結果、併願校として考える生徒が出たから</p> <p>▶前・中・後期の全日程を受験するなど、E判定でも最後まであきらめない生徒が増え、国公立や難関私大の合格者増加</p> <p>▶市内の短大・専門学校志望者は激減。コロナで先行き不透明な中、すぐに就活なので避けられた模様</p> <p>▶卒業後の職業がイメージしやすい医療系、情報系、デザイン系の学部に進む生徒が増加</p>	<p>▶普通科(特進、文理、総合進学)、商業科の4つがあるが、総合進学からも本年は早稲田、慶應が出ているので、成功。がんばった生徒に対して追い風が吹いてくれる入試で、浪人はほぼいない。年内入試は1回目落ちて、2回3回と受けるうち次第に易しくなっていた。「大学は本年は大安売りを意図的にした」印象</p> <p>▶内部進学枠が埋まるほど系列大への積極的な進学者が増えたのも特徴。大学改革が進んで中退率が下がった、高大連携事業で生徒が大学に行ったり、大学教員が高校に来たりするうちに、「おもしろい先生がいるから」と志望するように</p>	<p>▶一般入試約10%、年内入試約90%。一般は年々減少</p> <p>▶狙い通り指定校推薦は約33%(前年44%)に減る一方で、総合型選抜での合格が約46%(前年37%)まで増えた</p> <p>▶私大については、年内入試で偏差値帯が1ランク上の大学に挑戦する生徒が増加。一般でも同様の傾向。他方国公立大は共通テストの難化の影響で出願する生徒が減少</p> <p>▶学部系統で増えたのは、経済経営系、薬学、情報、建築系。減ったのは看護系。国際系も減少。留学できるか不明なら行かないという判断</p>	<p>▶一般入試約65%、年内入試約35%</p> <p>▶前年に比べ一般受験が増加した。入学定員の厳格化の影響が薄れ、年内入試に人が流れて一般の倍率も低下傾向、浪人生も減っており一般で勝負できると踏んだから</p> <p>▶合格した大学の顔ぶれに大きな変化はないが、学部系統だと国際系は減り、コロナで医療現場が大変なのに医療系は減らなかった。ただ看護に関しては、看護実習の実施が厳しい中、大変さを十分に理解させたうえで受験に臨ませた</p>	<p>▶大学、短大進学者は約半数程度</p> <p>▶一般入試約20%、年内入試約80%。最初から指定校狙いの生徒が多い</p> <p>▶コロナ禍以降、外国語系統の学部への進学者が減った。また志望理由も「語学を生かした仕事に就く」から「教員免許を取る」などに変わってきている</p> <p>▶文理選択で理系を選ぶ生徒が増加。理系だとゲームプログラマーなどゲーム関係の職業が人気。ただ進学先は専門学校志向</p>	<p>▶一般入試約25%、年内入試約75%。国公立大学進学者14人(一般5人、総合型5人、学校推薦型4人)で、例年並みの実績</p> <p>▶大学進学者は9割方、地元を離れる。進学先のエリアは主に中四国、次いで関西圏</p> <p>▶地元だと就職先が限られるため、保護者の資格志向の影響が強く、看護や教員養成系の学部が変わらず人気</p>
2023年度入試に向けて	<p>新高3生の状況</p> <p>▶一斉休校時に入学しているため、高校生活のスタートが2か月後ろ倒し</p> <p>▶学校行事も少なく、人間関係構築も難しく、情報収集力も低め。進路が自分ごとではなく、高2の冬でも進路を決めていない者が例年より多い。安易な選択を懸念</p> <p>▶今の高校生は「進路選びに失敗したくない」という気持ちが強い。だからこそ生徒は、「〇〇大学に行けばこうなれる」というキャリアの確約を望む傾向がある</p>	<p>▶成績優秀な生徒でも「そこに自分のやりたいことはないから」と、難関大を重視したり、偏差値を気にしすぎたりせず、やりたいことができる大学を選ぶ傾向が以前より強まってきた</p> <p>▶2023年度入試でも内部進学者のさらなる増加が見込まれる。内部進学とはいえ基準をクリアしないといけないので、内部選考が激戦りになりそう</p>	<p>▶オンライン授業やオンラインイベントに慣れている一方で、オンラインの限界もわかっている。卒業生から大学に行けないことで友達づくりにくい、サークルやバイトもしにくいという話も聞き、大学では失われた青春を取り戻すべく、リアルに学校生活を楽しみたい、それができる大学はどこかと考えている学年</p> <p>▶保護者には進路についてよく相談する。しかし保護者の大学のイメージは昔のままなので、保護者広報は重要だろう</p>	<p>▶あまり大きな変化は感じていない。総合型選抜や学校推薦型選抜に、生徒が大きく流れるようなこともない</p> <p>▶生徒はスマホでどんどん情報を集めている。紙の情報を見てスマホでさらに調べてオープンキャンパスに行っている</p>	<p>▶一言で言えば「リアルを知らない学年」。コロナ禍で部活も満足にできず、学校行事も中止。高校生活での成長を入試の面接等で問われた時に、どう答えたらいいのか、どう指導したらいいのか悩んでいる</p> <p>▶コロナ禍以前であれば、2年間かけてやってきたことを、この学年に限っては1年間で一気に詰めていかななくてはならない。そういった状況をくみ取り、オープンキャンパスなどは丁寧に誠実な学びの説明を</p>	<p>▶コロナ禍の影響で、オープンキャンパスに参加できないなど、外から刺激を受ける機会に乏しく、例年よりも進路意識が低い</p> <p>▶地方の高校なので、生徒の競争意識は高くない。その意識をどう転換するかが課題。さまざまな機会を設けて、刺激を与えていきたい</p> <p>▶1、2年次にどれだけ進路意識を高められるかが重要なので、修学旅行なども活用し、将来の仕事を実際に知ることができるような機会を設けたい</p>
進路指導の取り組み	<p>▶年内入試の志願者が増えそうなので、小論文対策講座の実施や授業の工夫で表現力、プレゼン力を高める指導を強化</p> <p>▶蓄積した進路情報をGoogleサイトを使い生徒がアクセスしやすいように工夫する</p> <p>▶推薦生対象の個別大学見学ツアーや大学入試担当者を招いての個別相談会を実施</p> <p>▶生徒・保護者への情報発信は、従来の紙とデータの両方を使い分ける。(例 期限のあるオープンキャンパスなどの情報はGoogleストリームで、保護者にも見てほしい入試動向などの情報は「進路だより」として紙で配付)</p>	<p>▶近年系列大学との交流が盛んになり、その教育に魅力を感じて積極的に志望した生徒が多くなるなど、変化がある</p> <p>▶生徒一人ひとりのニーズをきちんと捉え、教員の先入観を押し付けず、オーダーメイドの進路指導度合いをより強めたい</p>	<p>▶年内入試でチャレンジする大学の質にこだわらせる。全国規模の探究コンテストで評価された生徒も多いので、SFC(慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス)などへも臆することなく、受験を後押しする</p> <p>▶コロナ禍以降、大学から発信される情報が減り、結果「通いやすいからここ」のような選択の質が低下する生徒も。さまざまな大学を比較・検討させるため、大学情報収集法について厚くアドバイス。(例えば「建築」などのビッグワードではなく、「構造」などのニッチなキーワードで検索したほうが意外な大学がヒットする、など)</p>	<p>▶修学旅行が終わる高2・10月を一つの区切りとして、「3年・ゼロ学期」をスタートさせる</p> <p>▶高2・3学期に「志望校宣言」をさせて、生徒、保護者、教員の目線を合わせる。志望校を決められないままズルズルしないよう、ここで一つの区切りをつける</p> <p>▶全体への働きかけも行うが、一人ひとりにどれだけ指導できるかが大切なので、指導の個別化、最適化を進めたい</p>	<p>▶早期から総合型、学校推薦型を使って進学を考える生徒が多いため「自分自身を表現する力」を身に付けさせたい。それができないから志望理由書が書けない。自分のもやもやを言語化させ、そのうえで将来どうしたいかを考えさせる</p> <p>▶総合的な探究の時間で課題解決、提案に取り組むのも進路に役立つだろう</p>	<p>▶生徒には、可能な限り実際のキャンパスの雰囲気に触れてもらいたい。そのためバスを手配し、キャンパスツアーや学校見学会を設ける予定</p> <p>▶探究活動に関しては、外部審査が伴うコンテスト等に積極的に参加させ、客観的な評価を受ける機会をつくり、自信を付けさせたい</p>
大学への期待・要望	<p>卒業後のキャリアに関わる情報を手厚く</p> <p>入学した学科でほぼ将来が決まる医療系などは、学科別ではなく医療系職業全般についてガイダンスしたほうが、ミスマッチを防ぎ、自分に合う職業に目が向く可能性がある。一方将来の職業が明確でない文系の学部は、今の生徒にとっては将来が約束されない不安感につながりやすい。詳細なカリキュラムの説明と、それをやることによってどうなるのか、ロールモデルを提示してほしい</p>	<p>生徒の人生の選択肢を広げるような入試を特定の受験料を払うと何学科も併願できてしまう制度は、「大学生になればいい」という層には魅力的かもしれないが、ミスマッチが生まれるし、進路選択の本質から外れていると思う。また、情報提供だけを目的とした高校訪問はあまり歓迎しない。高校との関係づくりを目的とした高校訪問であれば、大歓迎</p>	<p>大学生生活のリアルを見せてほしい</p> <p>今の高校生はSNSを使った情報収集に長けている。在学生が発信する情報を見て志望校選びのヒントにする生徒も多い。また、例えば桜美林大学のように大学生と一緒にオンラインで探究学習に取り組むイベントを実施したり、文京学院大学のように学生を高校に派遣したりするような大学だと興味関心を持ち、志願につながりやすくなる</p>	<p>リアルな大学、学生の様子を感じさせて</p> <p>コロナ禍前は「出願する前に必ず大学に行って、キャンパスや学生の雰囲気を肌で感じて来るように」と指導していた。今後もオンラインでオープンキャンパスを開催するならば、学生の姿をリアルに感じられる機会、しつけをつくっていただきたい</p>	<p>APやDPに合致しない学生はとらないで</p> <p>かつて、ある大学の建築科が一般入試で「数学Ⅲ」を課さなかった。そこに進学した文系の生徒が勉強についていけず、結局、私が「数学Ⅲ」を教えた。大学の学びに必要な科目は必ず入試で課すべきだし、課さないのであればDPにかなう人材になるまで大学が面倒を見るべき。そうでないと学生が不幸になってしまい、高校からの信頼も失うだろう</p>	<p>地元の評判は大切に</p> <p>地方の大学が生き残っていくためには、地元から「面倒見がよい」と評価されることが重要。そういう大学は生徒に勧めやすい。探究学習など、高校生の学びを助ける形で大学と高校がつながる機会が増えれば、その大学で勉強するイメージが湧きやすい。高大連携の強化を、大学に期待したい</p>

*大学と高校をつなぐオンラインプラットフォーム

取材・文/本間学